



高大連携室だより



東京都立大学
(旧 首都大学東京)
アドミッション・センター
高大連携室

コロナ禍で明けた2020年度、高大連携室は、最初こそ活動を休止しましたが、高校の先生への連絡を取りながら高校生への情報提供をオンラインを中心に始め、スタッフ全員が協力して社会変容に対応した高大連携事業を展開しました。お忙しい中ご協力をいただいた高校の先生方、本学の教職員の方々に改めて感謝いたします。本号では、最近の活動の紹介と2021年度に向けた展開について紹介いたします。引き続き、みなさま方々のご理解とご支援ご協力をよろしく願っています。

高大連携室室長 河西奈保子(大学教育センター教授)



2020年度の活動紹介

特任教授・渡辺恒雄

オンライン利用の学び講演、学部学科紹介、キャンパス見学などの準備を進め、登校再開後の学校と6月から利用を開始しました。7月8月の大学説明会と11月の大学祭の中止に対して、予約制によるオンラインの特別講演会、キャンパス見学、個別相談会を開催しました。8月以降は、予約制のオンライン個別相談やキャンパス見学受付を継続的に実施しました。生徒から「大学生活の様子が変わった」「大学進学に希望が持てた」「高校生活を大事に過ごしたい」など、閉塞感を打ち破る思いが届けられました。引率の先生方から「大学を知る貴重な機会提供に感謝」「高校1年生が、先輩大学生の話を聞いて、高校生活に自信を持つ様になった」などの感想を聞きました。オンライン利用の高大連携事業は、対面式に比べて制約がある反面、遠方の学校の生徒たちとも連絡がとれるメリットがあることがわかりました。

学校との連携事業では、探究学習支援活動が新しい展開を見せました。学校に出向いて対面式の探究学習個別相談対応、複数校参加によるオンライン探究学習合同発表会、などです。探究学習を進める生徒の中には、研究心を持って取り組む生徒も見られます。

2021年度の活動の抱負

コロナ禍で変容する社会変化を見極め、オンラインと対面式の双方のメリットを活用した高大連携活動を展開する予定です。また高校での探究学習については、年ごとに発展を遂げて研究に繋がる可能性が出るのが想定されます。その際には高い研究力を有される先生や学生の皆様のご尽力に期待しています。

特任教授
渡辺恒雄



探究学習個別支援活動のひとこまから

特任教授・木之内 誠

今後の高大連携室の活動の中で、高校での「探究学習」への支援活動の比重が次第に高まっていくと思われる。この秋冬にかけて、県立S高校へ、院生スタッフ数名と共に数回出向いて、直接高校生たちと対面した筆者の経験とその感想の一端を記そう。

1年の秋に、各自の興味、関心によって2,3人ずつ合計百あまりのグループ分けがおこなわれ、それぞれのグループがそのまま2年の学年末近い時期までに、探究課題を完成させ、その発表を行うことになる。

実際に探究学習中の教室にいってみると、各教室ごとに数グループが、それぞれ机を寄せて話しあったり、スマホで何か調べていたりしている。「支援」という言葉には、なにか困っていることを助けるという響きがあるが、高校生たち自身が主観的に困っている時だけに、「支援」が必要となるわけでもない。支援側のわれわれは、彼らの相談や質問を受けるといふより、むしろこちらから話を聞きだして、気がついた点をアドバイスする、という部分が多い。

例えば、1年秋の仮テーマの段階で、「言語について」というテーマをあげていたグループは、聞いてみると「若者言葉」にターゲットを狭めようとしていた。でも、もうすこし具体的に絞り込んでいきたい。筆者は、「二月」のアクセントが「二ノガツ（後ろが高い）」なのか「二ノガツ（前が高い）」なのかという例を彼女らに問いかけてみた。

これは「首都圏方言」とか、「新東京方言」といわれるものの一例のようで、比較的新しい変化で「二ノガツ（前が高い）」のほうが急激に広まっていったように、筆者自身は記憶する。でも、こんな例示が、その後の展開に有効なヒントとしてつながったかどうかはわからない。支援活動のなかで、どの程度まで踏み込んで具体的な提案をすべきかという、アドバイスの「さじ加減」のようなものは、状況に応じて現場の体験のなかで、考えていくべき問題なのだろう。「探究学習」支援のあり方を、われわれ自身、まさに手探りで試行錯誤的に「探究」している状態にあるというのが、正直な現在の感想である。



会場とオンラインのハイブリット形式で行われた「探究学習合同発表会」一月三十日 東京都立大学

高大連携室の代表になって

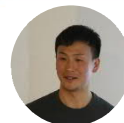
私が高大連携室で活動しようと思ったのは、大学院への進学とともに新しい環境に身を投じたくなったからです。ここでは、例年、高校向けの大学見学講座や大学説明会での受験生向けの個別相談会、来訪者対応などを通して、大学をめざす高校生に対して様々な支援活動を行っていました。このような同年代の人と協力しあって進める活動は、大学4年間で硬式野球部に所属していたこともあり、魅力的に映るものでした。

私は集団をまとめる立場を自発的にやることがなく、自分のまだ見ぬ力を開花させる機会と考え、高大連携室の院生スタッフ代表になることにしました。例年通りのスタートを切るはずが、院生スタッフ代表として私が本格的に活動を始めた2020年3月、コロナ流行の影響で連携室が完全に閉室となり、オンラインでの活動に切り替わることになりました。

大半の院生スタッフは修士課程在籍中の2年間で入れ替わるため、引き継ぎの期間は1年間しかありません。連携室発足以来、院生スタッフは下級生が上級生を見て、真似て、そして自分なりに考え、次の代に活動内容や思いを繋げてきました。緊急事態宣言の中、昨年までのような活動ができない状況で、どうしたら私たちが継承してきたものを後輩に引き継いでいけるか、苦慮することになりました。

今回の新しい生活様式の中で、私は自分一人のできることの限界を思い知りました。経験したことのない状況の中での行動の選択には正解はありません。誰もわからないからこそ一緒に活動するスタッフと話し合い、自分の考えと相手の考えを共有し、議論することの大切さを知りました。

私たちスタッフは2年間、連携室の方々のほか、入試課の皆様、教職員、本学学生をはじめ、多くの方々のご支援を受けてきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。



システムデザイン研究科
電子情報システム工学域
博士前期課程2年

太田史也

高大連携室の事務スタッフとして

2010年10月30日、「早瀬さん、明日からあっちへ行ってくれる？」

「あっちって？」8号館4階にある理学部生命科学科環境微生物研究室教授、松浦先生の秘書であった私の頭の中は「？」マークがあふれていました。先生が指しているのは南大沢キャンパスの南門方向。講堂1階（現在acorn caféのある場所）の一角が、先生のおっしゃる「あっち」でした。

その時から私は、松浦先生が室長をされる「高大連携室」の事務担当になりました。その後「高大連携室」は2016年2月に1号館106室に引っ越し、アドミッション・センター、河西奈保子室長のもと活動しています。部屋の運営、高校生や保護者の方への相談対応、大学見学講座やオープンキャンパス・大学祭での個別相談会等のイベント開催などを行い、毎年の積み重ね、引継ぎにより今があると思います。卒業してもそれぞれの場所でこの経験を踏まえ、さらにパワーアップして活躍されていると想像されます。現在コロナ禍という難しい時ですが、その中でできることをスタッフは日々考え新しいことにチャレンジしています。高大連携室もますますパワーアップしていることは間違いありません。

私自身、この10年で高校、大学、就職を経験した娘たちと、一緒に悩みいろいろなものを共有してきました。高大連携室を訪れる高校生、保護者の方々の悩み、疑問等を、わがことのように感じてきました。少しでも力になれば、また入学後には都立大でのキャンパスライフを楽しく充実したものになるように、お手伝いさせていただければと思っています。コロナが収束し、以前のように対面で高校生にお会いできる高大連携室に戻れる日を楽しみに、今はオンラインを中心にした活動を大切に過ごしていきたいと思っています。



事務スタッフ
早瀬典子



高大連携室のロゴと似顔絵制作者

システムデザイン研究科インダストリアルアート学域博士前期課程2年

二平章弘

高校生たちが気軽に入室できる部屋があると認知してもらうために、全体のシルエットが家の形になるようにしました。家の中にいるような安心感で高大連携室に来てもらいたいという思いを込めて制作しました。

東京都立大学(旧首都大学東京) アドミッション・センター 高大連携室

東京都八王子市南大沢1-1 東京都立大学南大沢キャンパス 1号館106室

開室：平日10時～17時 土曜13時～17時（祝日／入試日を除く）

● TEL: 042-677-2015 ● Mail: koudairg@tmu.ac.jp

最新情報はTwitterをご覧ください

HP

ホームページ



Twitter



Instagram



TMU_HOUDAIKENKEI